

日本語の比較言語学的研究

『長田夏樹論述集（下）』第24章

（原載：『日本神話の比較研究』有精堂，1977年4月）

本論文は『日本神話の比較研究』に載せられたものであるため、紙幅の多くを一般読者に対する比較言語学、母音調和、中期朝鮮語等々の概説に割いており、朝鮮語を始めとする諸言語と日本語の比較言語学的研究に関しては第2節5項および第3節2項以降で言及されるに留まる。

そのうち第2節5項で示された「日朝両語の再構形」は第22章の所説と重なっている。第22章で示されなかった語例は以下の通りである。以下「語 Ja., Ko., JK.」の順に示す。

「頸 kubi, mok, *ŋ^wúŋu」、「九 kökönötu, axop, *göyög^w」、「四 yötu, nei, *döyü」、「五 i-tutu, tases, ?」、
「重い omosi, mykev, ?」、「犬 inu, kaxi, *ŋiŋ^wi」、「露 tuyu, seri, *sül'i

「五」と「重い」の「日朝両語の再構形」は「？」とされている。なお、15世紀朝鮮語の seri は「霜」の意である。

第3節2項では「トモナフ」の接尾辞「ナフ」とアルタイ諸語の出名動詞形成接辞 -la- を同源としている。末尾の第3節3～4項では日朝両語の敬語を対応させ敬語形成接辞を同源として祖形をたてている。朝鮮語学でいう謙讓先語末語尾 *serp* を *mawosu* に比定し、その基語形を *ŋ^worbu と再構している。同様に15世紀語の恭遜先語末語尾 *ñi* を郷歌（「献花歌」の1節である）「折叱可献乎音理如」の「音」に比定し「中古音でこの音が *mi*, *emi* であったこと」を根拠に *mi* (*は付けられていない) を措定し、上古語「マス」と比定して -*ma- を再構している。傍証として両言語の借字「白」、「賜」を挙げている。

「賜」等の借字については河野六郎「古事記に於ける漢字使用」（1956年『古事記大成一言語文字編』所収）に夙に述べられているように「朝鮮に於ける使用をそのまま襲って日本語に宛てたもの」とするのがその後の借字表記法研究の蓄積を踏まえても妥当であり、*ŋ^worbu のような再構形を建てるのは朝鮮語学の立場からは首肯しがたい。（伊藤英人）